

二次交通対策に係る調査事例

平成30年度 調査事例								
カテゴリー	公共交通機関	公共交通機関	公共交通機関	公共交通機関	公共交通機関	高速バス	公共交通機関	公共交通機関、自転車
名称	秋田空港発着の乗合タクシー「秋田エアポートライナー」の取り組み	地域DMOによる二次交通整備事業「しまばらめぐりんチケット」の取り組み(実証実験段階)	富良野・美瑛地区の官民連携による広域観光地開発	北陸・飛騨・信州3つ星街道の取り組み	佐賀県唐津地域における公共交通の再編	空港間観光ガイド付高速バス 仙台空港・松島・平泉・花巻線	SUNQバス	はりまクラスター型サイクルスタイル(実証実験段階)
開始時期	2014年	2016年	2018年7月	2013年	2016年8月	2017年1月	2005年	2016年
運営主体	秋田空港からの二次アクセスを高める会(事務局 秋田空港ターミナルビル株式会社)	株式会社島原観光ビューロー	富良野・美瑛地区の官民連携による広域観光地開発(事務局 ふらの観光協会)	北陸・飛騨・信州3つ星街道観光協議会(金沢市)	唐津地域公共交通活性化協議会(事務局 唐津市)	岩手県北自動車株式会社(岩手県北バス)	九州内のバス会社(窓口 西日本鉄道)	神姫バス株式会社
連携組織	秋田空港ターミナルビル、タクシー会社、観光事業者	島原鉄道、観光事業者、地元商店街	バス事業者、観光協会、運輸関係組織	金沢市、南砺市、白川村、高山市	行政(唐津市、玄海町)、昭和バス、JR、航路事業者、観光協会、観光事業者、コンビニ事業者、	岩手県北バス、行政(岩手県平泉町、宮城県東松島市、宮城県松島町)、仙台空港、いわて花巻空港、観光事業者	九州内のバス会社	神姫バス、姫路市
事業費・利用者数等	年間 15,000～18,000 人	第一期実証実験(2017年11月～2018年5月) 2,176 人	期間中2,000枚(夏期1ヶ月)			月1,000名～1,200名(冬季は500名～600名)	年間150万枚49社(2,400路線対象)	月間250件
起点(駅、空港)	秋田空港	島原駅、島原港	JR富良野駅	金沢市	JR唐津駅、唐津バスセンター	仙台空港、いわて花巻空港	JR九州ターミナル駅	JR姫路駅、山陽姫路駅、神姫バスバス停
料金	秋田市内 1,500円～JR田沢湖駅 3,100円 等	1日フリー乗車券 大人1,000円 小人 500円	大人 2,500円(富良野周遊バス) 小人 1,500円	金沢～松本 大人5,500円 小人 2,750円	唐津市内線 200円～	仙台空港～松島 大人 1,000円 仙台空港～中尊寺/平泉 大人 2,500円	11,000円(全九州+下関 3日間)	無料(荷物預かり500円)
運行本数	航空便に合わせて 1時間に1本	1時間に1本	一日6本(夏期) 一日5本(冬期)	一日1本	1時間に1本	1時間に1本	10分～20分 1本	随時
二次交通手段	予約制タクシー	バス、鉄道	バス	バス	バス	バス	バス	自転車
情報提供(認知度)	JTB時刻表、観光ガイド本、航空会社パンフレット、ナビゲーションサービス、Googleマップの交通機関	観光案内所、WEBサイト	JR北海道車内、駅の観光案内所、WEBサイト	金沢市、及び周辺の観光案内所	JR唐津駅、唐津バスセンター	空港、WEBサイト	各ターミナル駅等(西日本鉄道が代理販売)	姫路駅 姫路市観光案内所、姫路駅前サイクルステーション、WEBサイト
特徴	・秋田空港と観光施設など複数の発着地を結ぶ予約制の乗合タクシー ・地元の観光団体、空港関係者、交通事業者、観光事業者など複数の有志が集まった「秋田空港からの二次アクセスを高める会」による運営 ・観光客および地元住民のアクセス方法として安定した運行を維持	・観光ガイドブッカー体型の鉄道(平日版)、バス(土日祝版)のフリー乗車券 ・地域DMO主体で行う二次交通整備事業 ・総合的な観光地域づくりの視点での企画・運営と利用者データの活用	・観光協会とバス事業者連携による域内周遊バスの運行 ・夏季、冬季にあわせた周遊コースを設定 ・地元運輸業者と連携し商品化、持続的に事業を継続する試み	・ミシュランの3つ星にランクされた観光地を持つ市町村間が連携し訪日客に訴求する仕組み ・北陸・飛騨・信州の各地事態、交通事業者が主体となり連携 ・地元運輸業者と連携し商品化、持続的に事業を継続する仕組み	・唐津地域(佐賀県唐津市、玄海町)における、地域住民の利用者減少と観光客の増加にあわせた公共交通の再編事業。 ・地域住民、事業者、行政、地域団体等との連携による事業の実施。 ・再編実施によって、地域住民と観光客それぞれの利便性の向上が図られている。	・2つの空港(仙台国際空港、いわて花巻空港)と観光地を結ぶルートでの「観光ガイド付高速バス」の運行 ・東北観光周遊ルートの起点として、どちらの空港も選ぶことができ、旅行商品開発やFIT(海外個人旅行)ニーズ対応の可能性が拡大 ・多言語にも対応した観光ガイドや利用者特典など、「移動」と「観光」を兼ね備えたサービスの提供	・海外の代理店への販売により拡大 ・試行販売当初から民主導	・観光拠点と公共交通機関のバス停・鉄道駅を自転車をつなぐ観光ルートの構築 ・行政とバス会社との官民協働によって、8市8町の『播磨圏域連携中枢都市圏』という広域で行われている取り組み ・サイクリスト受入環境の整備のみならず、播磨圏域での宿泊・周遊を促進するための観光ルートの構築に自転車を活用